SURE 静岡大学学術リポジトリ
Shizuoka University REpository

教職大学院から見た事業の成果

メタデータ	言語: ja 出版者: 静岡大学大学院教育学研究科教育実践高度化専攻 公開日: 2013-04-19 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 村山, 功 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10297/7297

教職大学院から見た事業の成果

静岡大学教職大学院　村山　功

本事業の一部は、教職大学院における「訪問実習」として位置づけられ、院生も参加している。以下に示すように、訪問実習は教職大学院の教育において重要な役割を果たしており、連携協力校にもメリットがあるならば、まさに「互恵関係」と呼べる関係となっている。

１．授業案の事前検討

訪問実習の前日の講義で、観察する研究授業の授業案検討を行う。これまで各院生が校内研修で行っていたような検討を行うだけではなく、講義で学んだ内容を実際の授業案の検討に利用したり、検討の過程で出てきた疑問を大学院教員が補足説明したりするなど、学習を深める重要な機会となっている。

この学習は、事前に授業案を入手できることが前提となっている。連携協力校の校内研修に参加する形態をとることで、先方に余分な負担を掛けることなく授業案を入手することができている。

２．授業観察

授業観察も各院生が校内研修で経験してきたことであるが、講義で学んだ内容を「授業を見る視点」としてまとめ直して授業観察に臨むことと、授業案検討の結果に基づいて計画的に観察を行うよう準備していくことが、大きな違いである。大学院の講義で学んだ内容は、一つの理論的な話としてそのまま理解されることが多く、それを実践に具体的に適用していくのは容易ではない。授業観察は、学んだ知識を変形して具体的な場面に適用できるようにしていく、という重要な学習の機会として機能している。

３．授業の振り返り

授業観察の後、連携協力校で行われる事後検討会に参加する前に、授業の振り返りを行う。詳細な分析は大学院に帰ってから行うが、簡単な分析であればここで試してみることもある。一つの授業をどう見るかということには個人差があるため、ここで多様な見方を交流しておくことは、事後検討会への参加の準備として有効である。

４．事後検討会

授業分析の後で、連携協力校の事後検討会に参加させてもらう。振り返りの結果を踏まえて院生自身が意見を述べることも事後検討会への貢献としては重要であるが、連携協力校の教員がどのように授業を見てどのような発言をするか、司会がどのように議論を進めていくかなどを観察することが、大学院で校内研修について学習するための大切な材料となる。

ここで行われていることは在籍校でも経験できることだと思われるかもしれないが、自校の校内研修ではないということは想像以上に大きな要因である。在籍校においては、昨年までの校内研修の状況と本年度の研修の位置づけ、他の業務の状況、校内研修に対する各教員の意識、研究授業の担当者の選ばれ方、授業力量や課題など、多くの情報を無意識のうちに考慮してしまい、校内研修について俯瞰することができにくくなっている。

学校の状況から身を離して考察する機会を得ることで、校内研修について改めて考えることができる。授業案検討においては、授業案と研修テーマとの整合性や研修テーマ自体の妥当性に、自然に意識が向いていく。授業観察の際にも、連携協力校の教員の観察方法が目に入る。事後検討会でも、発言や議論の進め方、その結果としての校内研修の生産性について考えざるを得ない。こうした経験が、２年次のアクションリサーチのための基礎になっている。

５．レポート

１～４の後、大学院に戻って再度研究授業の検討を行い、その結果をレポートにまとめて連携協力校に送る。これは、根拠に基づいて考察するためのよい訓練の場となっている。

６．提案授業

連携協力校との関係作りが進み、教職大学院生に提案授業を依頼されるようになった。連携協力校にとって有益な提案ができるよう、研修テーマを理解して提案授業を作っていく。

院生には、大学院で学んだ教育方法を実際に試してみたいという思いがあり、それを実現するよい機会となる。なかでもジグソー学習は、自分たち自身が大学院で体験している学習方法であるため、真っ先に候補となる。ジグソー学習を使って授業計画を立てていくと、一つの課題を分割したり、複数の課題を用意したり、あるいは複数の課題の学習成果を用いて解決する知識統合のための課題を作ったりということが、単元の内容によっては難しいことがわかってくる。ジグソー学習の仕組みを理解した後で、このような試行錯誤を通して適用条件を学んでいくことは、学校現場に帰ってから実践するために有効である。

ジグソー学習がうまく適用できない単元では、新たな教育方法を学んだり教材等を工夫することになる。本年度は、「仕掛けて待つ教師」という研修テーマに合わせて、「工作的発問」を用いた授業を提案した。教師が仕掛けても学習者が積極的に学習活動を展開しなければ、教師は待つことができなくなる。工作的発問では学習者が主体的に探究活動を始めるため、教師が待てる仕掛けとして適切であると考えた。

まとめてしまえば、「理論と実践の往還」という静岡大学教職大学院のテーマの具現化ということになるが、この事業は教職大学院生の学習にとって重要な学習機会である。